

それでもわが家から逝きたい

在宅介護の現場より

沖藤典子著

岩波書店 2000円＋税

日本では、自宅死は13%に過ぎません。平均入院日数も長く、末期在宅ケアの普及度も低いのが実情です。家族の介護力も老いの支援体制も脆弱な今、わが家から旅立つことなどできるのでしょうか。ノンフィクション作家の著者が、生活援助や老老介護、終末期医療など、老いの始まりから終わりまでのさまざまな問題について、「人間ドラマ」が数多く紹介され、「自分だったらどうだろう……」と考えさせられる話が続きます。

第1章 ほんの少しの支えがあれば

「これ以上、良くなったらどうしよう」と……

生活援助は、無駄なサービスだろうか

縮小された生活援助

要支援者を介護保険からはずす？

第2章 家族介護をどう救う

重度の妻、非協力的な夫

高齢夫婦間の介護、男性の介護

排泄介助に夫婦の機微が

第3章 在宅介護のふしぎな力

医師の反対を押し切った姉妹

末期の日々を一人で生きた

希望と現実の大きなギャップ

第4章 わが家を医療・介護の拠点に

訪問看護師の活躍と悩み

介護職がたんの吸引を

サービス提供責任者の重要性

定期巡回・随時対応サービスがはじまる

地域包括ケアシステムと住まい

第5章 人生の最終章のために

大往生でした……何もしない決断

特養ホームでの看取り

胃ろうをめぐる家族の葛藤

退院難民をどう救うか

